

【インドネシア保健医療支援事業】

医師 杉峰 啓憲

平成 19 年 5 月 19 日から 7 月 13 日までの 8 週間、インドネシア保健医療支援事業に行って参りました。活動の拠点は、ジャカルタの南約 50km のポゴール市にある、ポゴール・インドネシア赤十字病院（以下、ポゴール病院と略す）で、臨床現場を通じ、地域特有の疾患を経験するとともに、ポゴール病院の医療サービスの向上のためのディスカッションを進めるのが主な目的です。

現地の第一印象は、凄まじい交通事情。複数車線の道路にそれ以上の車列が割り込み、その間をバイクがすり抜けていき、その隙間に歩行者も…。そして、そんな通りから 2ブロックほど外れると、今度は瓦葺の屋根の平屋がひしめき合い、放し飼いの鶏が闊歩しています。そんな貧富の差が拡大して保険制度も整っていない中で、ポゴール病院は、人道という赤十字の基本理念のもと、できる限りの医療サービスの提供をしています。

小児は、特に脆弱な存在で、下痢をはじめとした感染症に罹患しやすく、医療サービスを受けられたとしても、受診が遅れたり、満足な薬や医療資材のない中で、予防や治療ができる疾患で命を落としていく現実があります。そして、デング熱や腸チフスという熱帯特有の疾患がはびこっています。

日赤の支援により、新生児病棟には、当院で使っているのと同じメーカーの保育器が活躍しています。しかし、それを現地の医療制度の中でいかに運用するのか、そして将来の方向性を明らかにし、持続可能性やオーナーシップを高めていくには、現地スタッフと派遣者のさらなる努力が必要です。

この事業は、インドネシア赤十字社と日赤との二国間事業の最新版で、大阪府支部も以前から参加しています。このような由緒ある事業に参加させてもらい、現地のスタッフから感謝の言葉をかけてもらったことは、今後、国際赤十字の仕事に取り組むための励みになると思います。最後になりますが、派遣期間中、1回だけ高熱と下痢が半日ずつ出現した辛い日もありましたが、現地スタッフが面倒をみてくれました。同じアジア人として、忘れかけていたものを思い出させてくれた温かい人々のことを私は忘れません。



ポシアンドゥという地域保健活動
でのひとコマ
幼児の体重測定と保健指導



医療機関を受診できない人の
ためのクリニック
薬を配る場所に村人が殺到



ポシアンドゥにて
体重測定が終わった子には
カワイイゆで卵のプレゼント